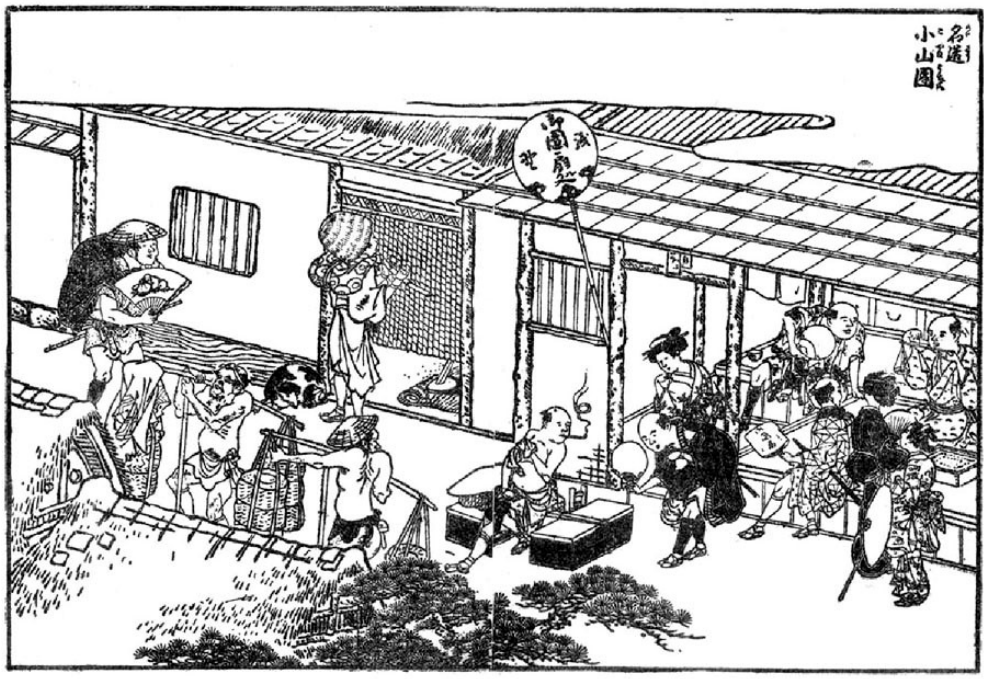
16.河内名所図会を訪ねて　その十　小山団扇①



名造小山團『河内名所図会』

享和元年(1801)刊行の『河内名所図会』巻四には、名所旧跡が並ぶなか「名造小山團(うちわ)」の図があります。街道に面した店先の様子が描かれ、旅姿の侍、商売人などの男女の往来の賑やかさがあります。大きな祭うちわのような看板に「御團扇処　浅野」とあって、屋号は「浅野」であることがわかります。みやげ物として求める様子のお客で、店はなかなか繁盛しているようです。本文には、「名産小山団扇、小山村に製す。柄は丸竹にて骨細く、美濃紙を以て張、渋にて染る。花車(きゃしゃ)風流にして、多く香(にほ)ひをとむる。女子(にょし)、これを持あそぶ」とあります。

・名物としての小山団扇

その 50 年ほど前、宝暦 4 年(1754)に編集された『日本山海名物図絵』にも「河内小山団扇」としてとりあげられていました。「柄は丸竹にて、しぶうちわ也、大小いろいろ有、名物にて貴人、高家へも召上げられ、又、農工商売の人々にも賞翫せらるる団扇なり」とあり、高級品としても庶民の愛用品としても用いられたようです。また、奈良うちわと比較して「小山はつよきを専とし、奈良は花奢を第一とす」とあって、その特徴を言い当てています。小山団扇の最大の特色は、全体によく均整がとれており、机の上などに立てることができること。非常にていねいに、そして丈夫につくられており、実用品としては勿論、工芸品としても充分の価値を備えていることです。丈夫な渋うちわとして、菜種の種揉み作業の際、ごみを払い除ける「種うちわ」としても求められ使用されました。図の少し右に見える旅姿の侍は、団扇が立つことを確かめようとしています。

「元禄十五壬午年(1702)より大坂両奉行所様へ団扇上る。尤も六代前の伊左衛門」という記録が残っており、大坂両奉行所を経て将軍家への献上が始まりました。また享保 7 年(1722)より「御買上御献上」となって、これは明治維新まで続きました。献上の時は、団扇を両掛(りょうがけ)に入れ、御用団扇の札を立て、道行く人に道を開けさせたということです。また、このため町人ながら苗字も許され、浅野伊左衛門家は代々御用団扇師として家格を誇るようになりました。気になるお値段ですが、昭和 61 年(1986)発行の『小山団扇』では、1 両を 70,000 円～100,000 円と見た場合、献上品は 17,500 円～25,000 円と非常に高価で、「お配り用」でも一本 7,000 円～10,000 円くらいとあります。今ならいくらくらいでしょう？

・山本勘助

この小山団扇の起源について、由来書は次のように述べています。 「昔、永禄(1558～1570)の頃、武田家の謀臣山本勘助が三好氏の動きを探るべく河内国にやってきて葛井寺に足を留めた。三好の一族が小山の砦に立て籠り畠山氏と争うと、勘助はひそかに小山に仮寓し、姓名を匿して浅野文吾と称して、かくれみののなりわいとして団扇を製造、商った。ところがその製造する団扇は、其骨つよく、其面は清く、柄を座上に立てても倒れず、涼しい風を送ること世の凡扇の類にあらずと大層評判をとった。しかし彼の主意ではなかったから、その二年程後、この製法を小山の村人某に授けて飄然と立去った。後に山本勘助の世を忍ぶ業であったと知れた。村人某は製法のみでなく、浅野文吾の氏名さえ承継いで、一子相伝の秘法とし、小山団扇の名称を世上に高く掲げた……」

一般に、現在の一本の竹を細く割いて竹骨とし、両面に紙を張った形の、紙と竹による団扇が造られるようになったのは、室町時代あるいは江戸以降ともいわれています。庶民ことに女子の夕涼みの風景にともなうものとして流行するようになったのは、江戸時代の貞享～元禄(17 世紀)のころです。小山団扇の起源もこの範囲ではないかということです。戦国期には、武将が軍の指揮、統率に使用する軍配団扇として団扇を用いており、権威と呪力と格式あるものとされていました。伝説的人物、山本勘助は兵法の大家であり、軍器全般の格式ある取扱いに関しては、その多くが彼の秘伝という形で伝承されました。ですから山本勘助と団扇の結びつきは決して突飛なものではないでしょう。個人的には山本勘助がその昔小山に住んでいたと信じたいです。

(2021 年 3 月　中澤)

参考:秋山蘿島編、丹羽桃渓画、堀口康生校訂『河内名所圖會』
平山良彦、渡辺謙二、富賀肇『小山団扇』
藤井寺市·藤井寺市商工会　1986 年
『藤井寺市史　第 2 巻』1998 年
平瀬徹斎編著、長谷川光信画『日本山海名物圖會』